

「見学 A コース」のご案内

絹の道資料館

- ホームページより -

資料館のパンフレットに“ 並はずれた商才と、開港地横浜へ十里の距離。このふたつの条件を資本に、時代の節目で活躍した鑓水商人の足跡 ” と書かれているように、この資料館は、養蚕、製糸の過程を紹介するための資料館ではありません。幕末から明治にかけて、生糸商いで活躍した鑓水商人がどのような背景で生まれ、どのような活躍をし、どのように活躍の場を失っていったかを紹介した、小さいながらも趣のある資料館です。本館の敷地は、鑓水の村名主であり、豪商として知られた八木下要右衛門家の屋敷地だったところです。明治 17 年に母屋が永泉寺本堂として移されてのちは、建物が建てられていなかったものを、その後発掘調査を経て屋敷跡を復元し、平成 2 年に資料館として開館されたものです。

<http://www.nises.affrc.go.jp/pub/silkwave/silkmuseum/T8Ooji/T8Ooji.htm> より

<参考 http://www.m-max.com/j_kkinus.html>

みやしん株式会社

- ホームページより -

かつて八王子は“織物のまち”として栄えた。けれども、昭和の中頃までごく当たり前だった機織の音や川での染色作業も今は昔の光景となり、織物産業もファッションの洋風化と共に徐々に衰退してきた。その中で世界に通用する“自社ブランド”を確立し、海外への事業展開まで進めている「みやしん株式会社」はひととき異彩を放っている。世界へブランド発信を行っている専務取締役の宮本英治（みやもと えいじ）さんにお話を伺った。

アメリカ・ニューヨーク 5 番街には世界でも最高級クラスの百貨店が並ぶ。たとえばバーグドルフグッドマンでスカーフを手にとったとしよう。「EJI MIYAMOTO」という名のブランド名がついていたら、それはみやしんで作られたものだ。あるいは、セントルイス美術館・ニューヨーク近代美術館・ロンドンのビクトリア・アルバート美術館にもみやしんの織物は所蔵されている。

http://www.cyber-silkroad.jp/co/06_miyashin/06_miyashin.html より

株式会社成和ネクタイ研究所

- ホームページより -

機械となった「手織機」(ておりばた)

自然に晒された木や麻の繊維を編むといった形で始まった「織りの歴史」。地面にクイを打ちタテ糸を張るといった原始手法、やがて創りだされた地機（じばた）から、高機（たかばた）へ…。その手織機と関連民具が集まっています。

近代織機が、いかに精緻であっても作れない「人々の手に自然の感触を伝え続けた数々の織物」。ネクタイは、その味わいを伝え続けるべき織物の座標軸の中心に在るといえます。

「温故知新」…。それが「機・資料館」です

<http://www.seiwa-nw.com/index.html> より

「見学 B コース」のご案内

八王子車人形（国の記録選択無形民族文化財）

- ホームページより -

車人形は、人形遣いがロクロと呼ばれる箱車に腰掛け、一人で一体の人形を操るものです。人形が舞台に足をつけて演技できるのは、世界でもこの車人形だけとされています。現在は、下恩方町の西川古柳座がその伝統を受け継ぎ、海外公演など幅広い活動を行っています。

<http://www.city.hachioji.tokyo.jp/sangyo/kanko/kurumaningyou/kurumaningyou.htm> より

車人形は、人形つかいが車を仕かけた腰掛車に乗って、一人が一個の人形と舞台に登場し、操作することから名付けられたものです。

腰掛車は、高さ 20 cm、長さ 25 cm、幅が 15 cm、くらいの木箱で、前に二輪後ろに一輪の木製の車がついています。とくに、後の車は中高（なかだか）の樽のような形をしていて、人形使いが自由な方向に進めるように工夫されています。

人形の首（かしら）や手足は、ほぼ、文楽人形と同様の操作が可能で、眉（まゆ）眼玉、唇（くちびる）などを自由動かせるようになっていますが、人形使は一人で、人形の首、左右の手を操作し、足は人形の踵（かかと）を足の指にはさんで舞台を踏んで歩く等、著しく異なっています。

また、文楽は、すべて演目が義太夫節によって演ぜられますが、車人形は、ほとんどが説教浄瑠璃（せっきょうじょうり）の演奏によって、すすめられます。

説教浄瑠璃は、義太夫節より古い語り形式の音楽で、徳川時代の中期には、江戸でも盛んに語られたものです。

義太夫が流行しはじめると説教浄瑠璃は次第に衰退し、江戸をはなれ、三多摩地方に受け継がれました。文久時代に西川古柳により車人形が考案されたことにより多摩川沿いに一時脚光をあびた時代もありましたが時代とともに衰退してしまいました。

<http://www.interq.or.jp/dragon/tombow/kurumaningyo.htm> より

糸工房「森」(あきるの市伊奈)

- ホームページより -

秋川のほとりで、糸を撚り上げ、糸を染め、紐に組んで、さまざまな絹糸の細工物を作っております。また、五日市でその昔、盛んに作られていた泥染めの絹織物「黒八丈」をよみがえらせた品々も展示・販売しております。

<http://www.akiruno.ne.jp/vsm/mori/>より

- 案内より -

当社の撚糸方法は、引張り撚り式の八丁撚糸法といわれるもので、他品種・少量生産に向き太めの絹糸を強撚するのに適した方法を用いている。この撚り方で製造された糸は、風合いが良く、結び易く、強伸度が高く医療用縫合糸に向いているということが特徴であります。この引張り八丁撚糸法は、現在国内でも非常に珍しい撚糸方法となっている。縫合糸以外では、刺繍糸・組紐用の糸の業界でわずかに残っているだけであろう。